

古文書を読む会学習記録

作成日 平成27年3月27日

開催日	平成27年3月26日	時 間	10:00～12:00
場 所	区役所区民活動センター会議室	出席人数	13名
講 師	真田雅行氏	作成者	伊達 一雄
テーマ	ジョン万次郎帰朝紀事 ③		
概 要	<p>天保12年(1841)万次郎は仲間4人をオアフ島に残し1人でホイットフィールド船長の捕鯨船に乗りアメリカに向かう。万次郎は満14歳、好奇心に溢れた少年の新たな冒険が始まる。その後万次郎はJohn Mung(ジョン・マン)と呼ばれ可愛がられたが、以後手紙等に本人もそうサインしている。</p> <p>○翌年、ギウアノム(グアム島)へ着く。30日余り滞船した後出帆し日本の東海や無人島(鳥島)の近辺で鯨を獲る。グアム島について「山高く、人の色合大抵日本人の如し、惣髪ザン切」で、家は数千軒で茅葺、と記している。この後、オアフ島を目指す为天候が悪く、再度グアム島を經由迂回して赤道の南を越す。</p> <p>○この後南アメリカの鼻(ホーン岬)を超える時、「廻り四十里五十里もある氷山を見る」。その後大西洋を北上し、北米の船長の故郷を目ざす。</p> <p>○翌年6月、北アメリカのヌベツリノタ(ニューベッドフォード)の港に着く。ここは船長の故郷だが、港の入口に大きな石の家があり、石硝子の火袋に終夜火を灯す(灯台であろう)のを見る。「北アメリカ三十四州、国主一人有りて、此主四年四年に替るといふ。一州ごとに庄屋のごとき者ありて政道を司り」とあり表現はともかくとして国情もしっかり把握している。アメリカ人については「惣分色白く、髪艶よろしく、男子はザン切、女子は後ろに束ね櫛で留める。眼は日本の如きもあり、又猫の眼のごときもあり。背は六尺より六尺式寸位、寿命は大抵日本の如く、たまに百歳以上の人もいふ」となかなか観察眼も鋭い。</p> <p>○対岸のハヤヘブン(フェアヘブン)に逗留して船長の姉に「文字を書事を習ふ」「九月より翌三月迄文の稽古に行く」と記しているので、きちんと英語の勉強をしたようだ。このほか「桶屋に行き、弟子になりて細工を習ふ」、「測量の師匠ありて、日々弁当持て習に通ふ」など万次郎の知識欲も旺盛である。</p> <p>○その後、28人乗りの別の捕鯨船に雇われ船出し、鯨を獲りながら大西洋、南アの喜望峯、インド洋を過ぎ、航海を続け、インドネシア、ニューギニア近辺でも操業をしたようであるが、地名については万次郎が聞いたままを記しているので特定は難しいようである。中には「人喰島」という所に係船したという下りもある。いずれにせよ万次郎が載った捕鯨船の行動範囲の広さは驚く程である。</p>		
次回予定	平成27年4月9日 10:00～12:00	於:金沢公会堂第3号室 第一学習 永嶋家文書④	